

立教開宗七百五十年記念出版

読むべき「世雄偈」の大切さ

廣田 頼道 著

序 文

日蓮大聖人様の読まれていた御経（「世雄偈」）を読むことは、日蓮大聖人様の説かれた正法を信仰する私達にとって、とても大切なことだと思ひます。

私が今迄発行して来た「芝川」誌の中で、

- ① 「芝川」 No. 6号（一九八八年五月20日発行）
- ② 「芝川」 No. 7号（一九八八年11月31日発行）
- ③ 「芝川」 No. 8号（一九八九年6月25日発行）
- ④ 「芝川」 No. 9号（一九九一年3月1日発行）

本文中①②③④の番号の所がそれぞれの号数と認識して下さい。

全体の主旨は変えていませんが、少々の添削推敲をさせてもらつた。

四編を編集した為、重複する点は容赦頂きたい。

の四回にわたつて、勤行について考える（一）（二）（三）（四）を掲載した。加えて、一九九三年（平成五年）九月二十八日・二十九日両日に行なわれた正信会教師講

習会の二十八日の発表の席上においては、「芝川」誌の中で指摘して来た。方便品の世雄偈を普段の勤行に際して読むべきであることを。発表時間の限られた中で「読むべき世雄偈の大切さ」という題名の資料コピーを出席の全員に渡して御話しをさせて頂いた。

一九八五年から現在迄17年間、このことに関する議論を喚起したいと思つて発言して来たけれども、「芝川」 No. 6号が絶版になつてしまつたことと、最近今迄送り続けて来たある人から、「芝川」誌の今迄の号を送つてくれと依頼され、「芝川」誌が読まずに捨てられ、読んで捨てられ、議論する心もないまま無視されて、自分達の信仰内容に立ち入つて考えることもなく時間が経過して来たことを痛切に感じました。

二〇〇一年は、この三寶院が福山布教所として一九八一年に開所され二十周年目に当ることから、「世雄偈」を読みはじめた当初から、大切な法要に「世雄偈」を入れて読経し法要を営みたいと思ひ、又、大切な御経と言ひ乍、一番大切な法要に読まないのでおかしいではないかとの批判も当初からあつ

た為、教区の方にもこのことを御願ひし、二十周年の法要と十月の御会式を、この年を期に今後は「世雄偈」を入れて営むようにさせて頂いた。

今迄の二十年間、この矛盾を何かの機に解消したいと思つて来たことが実行出来、僧俗共に二十周年法要と御会式を普段の勤行と同じ様に（世雄偈を入れ）出来、御宝前に二十年の歳月を刻むことが出来た報恩謝徳の志を報告することが出来ました。

立教開宗七百五十年の大切な年に、改めて四回にわたる論文を一冊の本にし、もう一度「読むべき世雄偈の大切さ」を多くの人に考え、感じて頂きたい。芝川誌を捨てて来た人も、無視して来た人も、改めて手に取つて読んで貰いたい。そして読み捨ての雑誌の認識ではなく、薄くとも一冊の本にして残し、私が死んだ後も、日蓮大聖人様が読まれていた「世雄偈」の内容を踏まえて勤行に読経することの大切さを考えてくれる方が出てくれれば、仏教の為ありがたいと思い、出版することとしました。

廣田は、世雄偈を読まない者は謗法であると言つてゐるという過激な揚げ足取りの批判があります

が、私はそんなことは言っていない。あくまでも御経は御題目の説明であつて、成仏の有無は御題目にかかつてゐる。世雄偈を読まない者は謗法だということとは、言い換えれば世雄偈を読まなければ成仏出来ない私が言つてゐるという指摘であります。そんなことを私はまったく考えていない。

日蓮大聖人が読まれていた世雄偈の御経を修行として大切に読んで、御題目の大切さをより深く感じて行こうということだけなのであります。

最後に載せた手書のプリントは、昭和六十年に、三宝院の御信者に啓蒙する時の勉強会のテキストであります。

合わせて御読み頂き、御理解を深めて貰いたいと思います。

多くの御信者さんに理解して頂けるように書いたつもりであります。大石寺の人達、創価学会の人達、日蓮系の信仰をしている人達が、この本を読んで日蓮大聖人様の勤行の原型はどうだったのかを深く考へて頂ければ仏恩報謝の為ありがたく思います。

読むべき「世雄偈」の大切さ

①

私が身近に信徒と接するようになってから今日に至る迄、大変気になることがありました。それは御経の読み方、題目の唱え方であります。

速いテンポで唱えている時は、さほど感じることはないのですが、葬式とか法事の時にはつきりと発音のわかるテンポで御経を唱えると、ほとんどの人が、つかかるか、いっしょに唱えることが出来ないのであります。挙句の果には、「修行が違う」とか「そんなにきつちり出来ない」というのであります。

つまりこれは、速いテンポの時には誤魔化されるものも、遅いテンポになると誤魔化せなくて唱和出来ないということにはほかならないのであります。

昭和五十六年に福山の地に布教所を開かせていただき、事あるごとに御経の読み方を信徒に注意して来ましたが、一般的になつてしまつて速いテンポの勤行では、一向にちがひがあきませんので昭和六

十一年の中旬より五座、三座の御経をしなくて良いから、方便品、寿量品、自我偈をゆつくり二十五分余り時間をかけて読み、その後題目を十分から十五分余り唱え、(朝の勤行の天拝はする)五座、三座の御観念をまとめてして、勤行とするようにと御願いしました。

気が散つて、「十如是」が何回目か分らなくなつて、二度で止めたり、四度してみたり。今やつてゐる勤行が何座目か分らなくなつてしまつたり、そういうことばかりに氣をつかう勤行。まちがった早口の、自分さえ良ければいいというような自己満足の勤行を、五座、三座と繰り返すよりも、少しでもまちがいのない、ていねいな、心の込められる勤行題目の方が、どれほど信仰にかなうかしれません。

創価学会員の暴発的な増加によつて、元来地元の僧侶からの口写して習つてゐた御経がまったくなくなつてしまひ、初信の頃より、集団で唱える、くずれた御経、題目に染つていつてしまったことが今日の勤行の現状になつてゐると思う。そしてこのような信徒の姿は多勢に無勢で僧侶達もこの影響を強く受け、御経がくずれていつたものと思ふのでありま

す。

御経に関する読みは口写しで伝承されて来た為、ほとんどその資料というものがありません。このことも乱れるに任せられて行く大きな要因だと思えます。しかし一方、創価学会員の増加の中で、それ迄大雑把で各末寺バラバラに任せていた勤行用式を化儀統一という名目のもとに五座、三座とし「世雄偈」の廃止を創価学会の要望をも受けて決定したのであります。それ迄は五座全てに長行を唱える末寺もあり、それに「世雄偈」を加える末寺もあり、あくまでも簡略にすまざる末寺もありで、一様ではなかったわけであります。一様式にすることは良いとして、ここで「世雄偈」をすてるといふ愚を犯してしまつたわけであります。

創価学会の要望と、簡略に走る希望が一致して、「世雄偈」を廃止したにもかかわらず、大石寺はそれから何年も教師補任式に望む段階の最終試験には「世雄偈」の読みを試験課題として入れ続けていたのであります。なにかしらゆがんだプライドのように思えるのであります。

日達上人も、現日正寺住職、秋山海学師を我々小

僧もいるような場所で「まだ世雄偈を読んでいるのか、やめろよ」等といつていたことを私は記憶していますが、組織の統一性、画一性の前に、もっと大切にしなければいけないものがあるのではないかと思うのであります。

現在あたり前のようになっている五座、三座の勤行式にしても、資料も口伝もありませんから、勤行要品によつて推察すれば、明らかに大聖人御在世にこのような勤行型体になつていたはずはないのであります。

初座（天拝）はともかく、二座の御本尊様を除く、大聖人、日興上人、日目上人、歴代御正師等の御報恩謝徳に供する御経は、まったく後世のものであつて、五座、三座、の型式は大聖人の御在世にはなかつたはずであります。

日興上人の御報恩は日興上人滅後に加えられたものであり、日目上人、歴代等の御報恩は日目上人滅後に加えられたものであり、修行としての原型と、時代と共に変型、応用されていったものとして考えた時に、原型をはずれて、応用が永年の慣習によつてあたり前と考えられる状態になつてしまつてい

のであります。

私は五座の勤行式は、日興上人、日目上人が亡くなられるにつれ、大石寺法門の上において、日興上人を、日目上人をどの様に位置付けられるかということ、観念文の中に示したと思うのであります。加えて大石寺の諸堂が完成整備がなされて行く状態の中で諸堂を巡って一座ずつの勤行をされていたと思うのであります。

たとえば日正上人の時に、垂迹堂をつぶしたという。御影堂の茶店の所に、天拝の御経を読む御堂が建立されていたといひます。御影堂は大聖人在世をそのままに写された意味がありますから二座の本因妙教主の御観念の経に合うということになります。戒旦本尊の揺拝、客殿、大石寺の法門の基本を成す諸堂において一座ずつ御経を供えるということが勤行形式の姿であったと思うのであります。今日でも一夜番が御華水を汲んで諸堂を巡り御水を供え、そして御経を唱え次々と廻って行くのは、その原形を汲む姿ではないかと思うのであります。

そしてこの形体が永年の内、雨、風の日、多人数となり、一ヶ所の堂において、五座、三座の勤行を

するという形体に落ち着いたものと思うのであります。

私は五座、三座が原形ではなく、五座、三座の観念に込められた、法門といい、信仰の真心は大切な絶対のゆるがせにすることの出来ぬものと思います。しかし、それとは別に勤行式の本来の姿は、方便品、方便品長行、寿量品長行、自我偈、題目、これが大聖人の定められ、大聖人のされていた姿ではないかと思うのであります。

つまり勤行とは、日蓮大聖人の教義とはなんぞやという問いに答えられる簡単明瞭な看板であると思うのであります。

もちろん勤行の中心は題目であります。今日の様な、早口で忙しそうに、何を言っているのか分らない御経の唱え方、そして、御経の後の三分く五分位いのお茶漬サラサラの様な題目では、口では、御題目こそが根本と言っている、その姿を見れば、題目を中心、根本にした勤行とはいへません。

方便の扉を開く、寿量品の扉を開く、文上から文底へと、文底の大聖人様の題目に出合い、題目を信受する。これが大聖人の法門であり、勤行でありま

す。

方便品の十如是迄は略開三頭一の内容であります。

略開三頭一とは、略して（おおむね）、三（法華經以前の声聞、緣覺、菩薩の三乗の教え）を開して（明らかにして）一を（一乗の法華經）を顯わす。ということであります。

方便品の十如是迄では、内容の点からいつて、三乗への説法は方便ですよ——という所迄の意味内容で、三乗に説いて来た説法は一乗へ誘う方便ですよ——という所迄しか示していませんのであります。

次に「世雄偈」の部分に入っていて、広開三頭一が説かれるのであります。広開三頭一とは、広く（全体に）三乗の教えを開して（明らかにして）一を顯す。ということ、内容は、略開三頭一が、方便ですよという意味内容にとどまっていたものが、三乗への方便の説法をすてて、真実の一法へ導く——という方便品本来の役割りをここに示しているのであります。

法華經は爾前迹門の化他の經と違い、自行の經だということを行います。つまり衆生の側に合せた隨他意の御經ではなく、仏の本懷を示した隨自意の經

だということをいいます。しかし仏は、序品から、方便品の広開三頭一の説教に入つて来て、はじめて自行の説法をするわけであります。

「会中有。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。五千人等。即從座起。禮仏而退。——」

五千人の僧上慢の衆生が退く姿があつて、そこからはじめて仏自身の自行の經が示されて行くのであります。ですから五千人退座の後にすぐ一切衆生に対する因縁と慈悲（一大事因縁）を示し、開仏知見、示仏知見、悟仏知見、入仏知見の諸仏世尊の四仏知見を示すのであります。

「世雄偈」の最後は

「諸仏如来。言無虚妄。無有餘乘。唯一佛乘。」であります。これは、

諸仏如来は言（みこと）虚妄なし、余乗有ることなく、唯一仏乗のみなり。

と示して、当宗で方便品を所破偈文の為に読むという意味は、略開三頭一だけではその意味は不満足であり不充分であり、略開三頭一（実は方便なんですよ）、広開三頭一（方便だからすてなさい）の二つが一つになつてはじめて、破折する為に方便品の

文を借りるという所破借文の意味が通じるのであります。

方便品の中に三乗方便の破折を含む。それ故に当宗において「世雄偈」を読む必然と必要があつたのであります。

「唯一佛乘」として、所破所用の寿量品につながつて行くという所が大切な所なのであります。

四之坊の住職であつた松岡慈契師は、最近でも柱師は世雄偈を読まれていたが、堀上人はそれをおやめになり、開師がまた御遠忌あたりになつてお始めになつた。それが恭師の頃まで続いたようで、世雄偈をやめたのは戦後になつてからです。時の猥下の考え一つで読むかどうか、お決めになつていたようですね。

(蓮華76 12月号58P)

この様に世雄偈はその時代、その猥下の好嫌によつて読んだり読まなかつたりで来たようである。それは方便品は助行だから二の次のことだという意識が動くからであらう。次に寿量品長行よりもはるかに長いということ、長い為に時間がかかる、御経本が必要になる、速く読めない、くずせない等々、めん

どくさがりには悪い所づくめなのであります。

私は先に書いた理由から世雄偈は読むべき御経だと思ひます。私は、六十一年の九月から半年間朝夕の勤行の一折に読みはじめ、最初は一時間ぐらいかかりましたが一ヶ月位いで三十五分ほどで方便品から自我偈迄唱えることが出来るようになりました。そして六十二年の三月から、良いことであるならば、出来ることであるならば、自分だけがするのではなく僧俗共々にした方が良いと思ひ、信徒にもすすめました。すると案の上、他の僧侶から

。方便品は助行だから
。信者が混乱する。

。今迄のやり方で充分
。よその寺でしていいものを

。正信会としてすすめていいものを

。今迄やつていないものを

。うちだけやつてまちがつていゝのでは

。今迄の勤行でも長くて大変なのに

。近年の猥下でさえもなくしたのに

。住職がやるのは勝手だが、信者はやる必要がない

。読んでいゝことをひけらかしてゐるんだ

。世雄偈を読んでいるという慢心がある

。五座、三座の化儀を軽んずるのか

。やるならば、五座、三座、全部に「世雄偈」を読まなければおかしい

。「世雄偈」を読むと、廣田の今迄の主張を認めることになるから読まない

。読んでも読まなくてもいい御経なら読まなくていいではないか

。日蓮大聖人様が読んでいたかどうか分らないじゃないか

。日興上人でも小僧が憶えないことを理由に止めたぐらいなんだから重要な御経ではない

。一番大切な法要に何故読まないんだ
等々、色々な意見がありました。

私は単なる化儀として、時代によって変化自由とか、猊下によって変化自由等と勤行を考えることはまちがいでと思います。

七〇〇年来の仏法の流れの源で、大聖人、日興上人、日目上人と、あたり前のごとく御読みになられていた信仰の姿であって、そのことを私達はうかつにも知らなかったのであります。

時の猊下といえども不読を論ずることの出来ない法門なのであります。

正式には読むのだが、この御経では略そうというのであれば、まだ経文の意味内容が心に留まっているということでありますが、省略していることも、経文の内容も忘れ、見下し、今日の姿があたり前と考えているのであるならば、本来の教義を忘れ、当宗においては、法華経をどのように拝して行くのかの法門の基盤を忘失することになるのではないか。

ナンミヨウホウレンゲキヨウとあたり前に正しく唱えることも出来ず、

ナベオホレナベオホレとかナキヨナヨとしか聞かない題目と思い込んでいる呪文を唱え、百万遍唱えただ、マヌ目を塗っただ、題目を唱え乍ら手には改札口のカウンターをカチカチと打ち、十五分で五座の勤行をしたと自慢したり、

こんな悲惨な創価学会員の姿を見て苦しまない人間は商人であって僧侶とはいえないのではないか。

元来、御経とはマイクがなくても百人、千人の人間が一同に会しても唱えられるようにつくられてい

るものであります。

僧侶自身の勤行も、本山での丑寅も御開扉も、まるで機関銃のように、マイクなしでは成立しない御経と化してしまっているであります。

マイクがなくても自然に唱和出来る速度。それが本来の読経であります。題目にしても太鼓にリズムを刻める速度はおのずから決っています。それが自然の速度であり、その流れにそって御経を唱え題目を唱えることによって、安隠とした気持ちに満たされるのであります。火事場の半鐘のような速度で、本当に御経を読み功德を積まさせていただいたという気持ちになれるかといえ、私はなれないと思う。そしてそればかりか修行することを自他共に軽んずるようになると思える。

読まなければ謗法だとか、成仏出来ないということとをいつているのではない。読めば利益があるといっているでもない。

毎日の修行の中で、何故方便品を読むのか、読むならば、どういう意味内容が含まれていなければならぬのか。読めない理由がないのなら、良いことならばすばいではないか、このように私は思

う。「世雄偈」は法門的に取りはずし自由のものではない。

②

芝川6号で「勤行について考える(一)」として発言した所、何人かの反響と問い合せがあった。中でも、読みたいのだけれど、どういう方法で読むのかとの質問が多かったので、最初にそのことを書かせてもらいたいと思う。

世雄偈を入れた時の勤行の仕方

朝の勤行の時の天拝は通常通りであります。

正面に向き直って、方便品、十如是の三返繰返しはしないで、そのまま通して読み続ける。鈴も当然打たない。世雄偈の最後にきて、便宜上「唯一仏乗」の「乗」を心持のぼしつゝ読み、壽量品に入りにしたがって三打し、読み続けて行く、あとは常の勤行式と同じであります。

十如是三返読誦の意味

話しのついでになりますので、「世雄偈」を入れて読む時には、十如是の三返読誦をしないことから述べたいと思います。

十如是を空、仮、中の三義に解釈して三回繰り返して読むという風に理解されていると思いますが、それでは何故世雄偈を読む時にそうしないのか、ということになります。

十如是を三回読むことによつて世雄偈を略すという意味の方が重いと思えるのであります。つまり、三返読誦するから空、仮、中になるのではないということでありま。

一に如是相、如是性……の仮諦の義は、初めの相も、終りの報も、平等に顯然とあらわれて、區別差別された姿を表わす。

二に是相如、是性如……乃至本末究竟等如とは、空諦の義を顯わし、初めの相も終りの報も、平等に空寂無相の一味平等を表わす。

三に相如是、性如是……乃至本末究竟等如是とは中諦の義を顯し、相にあらず、亦無相にあらず、乃至報にあらず、亦無報にあらず、本末平等に中道

実相なるを表わす。

ということでありま。つまり、十如是の經文を区切る場所によつて、仮諦、空諦、中諦の三義を持つということがあります。

如是相、是相如、相知是

と、なるんだというわけであります。しかし、三転読誦の時には、三義の区切りと発音で読むということとはしません。心でその意味を拝して行くということであつて、実際には世雄偈を略して抜く為に三返読誦をしているという意味の方が強いということなのであります。

三転読誦が不可欠のものであるならば、世雄偈を読む場合も不可欠のはずになるはずであるし、空、仮、中の三義読みを云々というならば前に挙げた区切り読みをしなればおかしいということになります。

以上のことから重ねて、世雄偈を略す意味から三度繰り返す読みが定着したのではないかと思うのであります。

松尾慈契師の伝聞のまちがい

芝川6号の8頁に、蓮華76年12月号58Pの文章を引用した。このインタビュー記事の中で、師は堀上人はそれ（世雄偈）をおやめになり、開師がまた御遠忌のあたりになつてお始めになった。ということ話されていますが、

井上豊道師の指摘で、竹尾清澄著「畑毛日記」（11頁）の中に、こういう記述のあることを教えてもらった。

丑寅勤行における方便品長行読誦について

現在ではどうかであるか。私の記憶する限りでは、日正上人は勿論、日柱上人まで丑寅勤行では方便品の長行を読誦されていた。それが何時とはなしに十如是だけになった。そしてそれを亨尊からだとする向があり、中には「御隠尊の御蔭で助かりますよ」と面と向つて御礼を云う人まで出た。しかし事実無根のことで、亨尊は怠慢なく長行を読誦なされたので「悪いことは皆私のことにしてしまふ」と怒つておられた。

このように書かれている。宗学要集編纂の手伝いとして、山峰淳氏と共に堀上人と寝起きを共にされ、

朝夕の勤行をされた氏のことであるから、疑う余地はないと思われる。

堀上人御自身がいわれているように、

「悪いことは……………」

ということとは、世雄偈を略すことに対して、良いことと思つていないということになる。

つまり、世雄偈は読むべきだという御考えがあつたことが明確にうかがえる。信徒のいる時は聖僧ぶつて御経を律義に読むが、自坊の御内仏様とか、プライベートな時間になると勤行をしなかつたり、飛して飛して略して略して、いい加減にする僧侶が多い。畑毛に居をかまえて世雄偈を読まれていたという事実に対して、まったくの誤解と、心ない伝聞によるものと拝する。学僧として微動だにしない堀上人の名前を悪用して、こすからい僧侶が世雄偈を略す免罪符にしていたのであろう。

月水御書に教示された意味

前に挙げた「蓮華」の58Pに、「芝川」6号では引用はしなかつたけれども、
なんだか、大聖人も世雄偈は読経なされなかつた、

有師の頃から始める様になったという噂はある。
という発言がある。しかし「月水御書」(全集1201頁)には、

法華経は何れの品も先に申しつる様に愚かならね

ども殊に二十八品の中に勝れて、めでたきは方便品と寿量品にて待り、余品は皆枝葉にて候なり、されば常の御所作には方便品の長行と寿量品の長行とを習い読ませ給い候へ、(中略)されば常には此の方便品・寿量品の二品をあそばし候て、余の品をば時々、御いとまのひまにあそばすべく候。

と、御教示されている大聖人御自身が、世雄偈の読誦をしていないということはあり得ない。「月水御書」は大学三郎の女房に対して与えられた御書といわれるもので当時女房が何才であつたかは皆目分らないが、幕府に近い立場の学者の女房という点を考えると、二十代や三十代の若年とは考えられない。

又、女性の慎みということにうるさい時代であり、武士の女房であり乍ら、「月水御書」の内容にある所の、女性の生理時に勤行しても良いものか否かを、恥かしがることなく正面から質問をされるといふことは、真剣に信仰を志し、男尊女卑の風潮の中にあつ

ても、あるがまま真摯に聞きたいことを求められた姿であり、りっぱな信仰だと思ふ。加えて、大学三郎女房が鎌倉在住の女性信徒の本音の気持を代表して、大聖人に聞かれたものとも思われる。

これらのことからして、当時の人間は文字を読むことも出来なかつた「文盲」の人が多かつたし、毎日の生活に明け暮れる人が多かつたのだから、御経迄読める人達はまれで、題目を唱えるほどが関の山だと考える人がいるが、それは間違いだと思ふ。大学三郎女房一人だけのことでなく、当時の御書は廻覧されることを加味した上で認められているものであるから、女房並に鎌倉在住の信徒全体への影響を考えないわけにはいかないと思ふ。

常の御所作には方便品の長行と寿量品の長行を習い読ませ

とは女房一人へのことではなく、信徒全体にすすめていたものであることをみとめないわけにはいかない。

宗祖、開祖、三祖の方便長行読誦の事実

松尾師は日有上人の頃より、とされていますが、

「大石記」(宗学要集旧版10巻155頁)

日目上人は日興上人へ佛法の御異見をば御申しありき所謂方便品の開三計り遊して廣開三(世雄偈のこと)をあそばさざりけるを、日目、日興上人へ御申しある様は大聖人の御時已に遊され候しに尤も読むべきにて候如何んと、其の時上人仰せに云く尤も爾るべく候へども新発意共が自我偈をだにも覚えざる程に之を略し候、已後読み候べしと其れより遊ばしけるなり、又其の後中絶したりけるが今の日恩の時又興行して南の坊主に書かせ参らせて大貳阿等を始めとして懷中して稽古して読み給ふなり。

と示され、大聖人の時代より、日興上人の時代、日目上人の時代と、三祖の時代においてあたり前の如く正統な修行、所作として、諫められ乍ら行なわれていたわけであろう。

「大石記」は第六世日時上人の談としてまとめられた書物であります。日興上人も気軽に止められたというのがこの項目における文章の主題ではなく、一番この文章の後世に伝えたい主題は、日時上人の時代においても、中絶していたけれども、努力して

もとの姿にもどして、老僧と想われる方々が経文を懷にして稽古して読んでいるという記述であります。ここに触れる時、時代の流れに変化する化儀ではなく、時の眞主の都合によつて読、不読が判断されるべきものでないことが分かる。

正信会において、師弟の筋目と、仏法のあり方という点から、随分、この「大石記」の御文を引用して、

日興上人でさえ、日目上人の諫めを用いて事を改めたことがある。師弟とは上意下達ではなく、こうあるべきなんだ。

ということを強調されて来た。文章の表面だけを、自己流に悪用せず、法門の上に立つて諫め、改めた、その内容を用いなければいけないと思う。そうでなければ不知恩、悪用の徒ということになってしまう。

宗祖、開祖、三祖と拝読されたことを証明する、この資料一つで、現在の我々が読むべき経文であることは、迷うことなく明白であり、他の一切の論議の及ぶ所でないことを自覚しなければいけないのではないだろうか。

以上のことから、松尾師が示される

。宗祖は世雄偈を読んでいなかった。
。有師の頃から読むようになった

という主張は、何の根拠もない風聞の愚ということ
が明確になった。

日寛上人「当流行事抄」に見る、方便品長行読誦の 正統性

「当流行事抄」(学林版六卷抄³⁰¹頁)に

問う、今当門流或は但十如を誦し、或は廣開長行
を誦す。その謂れ如何。

答う、十如の文概に是れ一念三千の出處なり。故
に但之れを誦すれば其の義則ち定りぬ、然りと雖
も略開は正開頭に非ず、故に一念三千猶未だ明了
ならず、故に廣開に至るなり。疏記三下に云わく、
今諸佛及び釋迦を歎ずるは下の五佛の弄引の為な
り等云云。又第七に云わく、略開は但是れ動執生
疑にして正開頭に非ず等云云。宗印の教義に云わ
く、三千は是れ不思議の妙境なり、若し開權顯実
に非ずんば豈能く互具互融せんや云云。開目抄に
云わく、法華經方便品の略開三頭一の時佛略して
一念三千の本懷を宣ぶれども、時鳥の初音を寢臥

たる耳に聞くが如く、月の山の端に出でて薄雲の
覆えるが如く幽かなり等云云。故に知んぬ、若し
広開に至らずんば一念三千其の義仍お未だ分明な
らず、故に廣開長行(世雄偈)を誦するなり。大
覺抄(月水御書)の中に方便品の長行をも習い読
むべしと言うは即ち廣開の長行(世雄偈)を指す
なり。其の間に偈頌ありと雖も比丘偈の長篇に望
むれば其の前は通じて皆長行と名づくなり。

と示され、十如是迄の略開三頭一では不充分であり、
世雄偈迄の広開三頭一迄読んでこそ、略開、広開の
一体になつてこそ正開頭といえるのである。という
ことを述べられ、本宗の法門と所作は、このように
あるべきものであるということを、日寛上人は示さ
れているのであります。

要法寺よりの貫主が登座するという暗黒の時代が
日寛上人の前の時代に横たわり、その要法寺からの
悪影響が色濃く残っている中で、当然行体所作が改
悪され、人々がそれをあたり前と感じていたものが
たくさんあつたと思う。そういった現実に対し、日
寛上人が、他宗にも自宗にも「当流行事抄」と題し
て六卷抄の一書に入れ、このように示されたという

ことの重さを、私達はまじめに受けとめなければいけないと思う。

まとめ

芝川6号の「勤行について考える(一)」において、私は、

1. 勤行というものは日蓮正宗の教義とはなんぞや
という問いに答えられる簡単明瞭な看板であると思
うのであります。――
ということ、そして

2. 現在の勤行のあり方は世雄偈を略していること
も忘れた、まちがった所作であるということ

3. 世雄偈を略した五座、三座よりも世雄偈を読ん
だ一座の勤行を大切にすべきだということ。

4. 時の貫主といえども不読を論ずることの出来な
い法門だということ

この四点を主張したつもりです。

そして、今回この(二)においては(一)の中に示した、

。方便品は助行だから

。信者が混乱するから

。今迄のやり方で充分

。よその寺でしていないものを

。正信会としてすすめていないものを

。今迄やっていないものを

。うちだけやってまちがっているのでは

。今迄の勤行でも長くて大変なのに

。近年の猊下でさえもなくしたのに

。住職がやるのは勝手だが、信者がやる必要がない

。読んでいるということをひけらかしているんだ

。世雄偈を読んでいるという慢心がある

。五座、三座の化儀を軽んずるのか

。やるならば、五座、三座全部に「世雄偈」を読ま

なければおかしい

。「世雄偈」を読むと、廣田の今迄の主張を認める

ことになるから読まない

。読んでも読まなくてもいい御経なら読まなくてい

いではないか

。日蓮大聖人様が読んでいたかどうか分らないじゃ

ないか

。日興上人でも小僧が憶えないことを理由に止めた

ぐらいなんだから、重要な御経ではない

。一番大切な法要に何故読まないんだ

等々の、一つ一つに對し、これらの主張がいかに意味のない批判と議論なのかということを、今回示したつもりであります。

ある住職は、自分はしているが信者はどうも——という。混乱を想像し自分だけの満足で足踏していることはまちがいだと思う。一つの段取として先に住職がやるということならば分かりますが、本来あるべき正しい姿にもどるには僧俗そろって努力すべきが当然と思います。

足並みを揃えることを中心に考えるか、法門を中心に考えるか、ということに迷う住職がいるが、ねばり強く段階を踏み、道理を通して、法門に足並を揃えて行く為に指導して行くことが信仰だと思う。

古来のあるべき姿に帰るといつても、どの時代迄帰って線を引くべきか——。という議論もある。しかし私は、出来る所から、法門にそぐわないことは捨てて行く、改めて行く、法門にそって証明出来ることならば新旧にこだわらず改めて行くことが大切なことだと思う。

世雄偈を読むということが、懷古調の望郷病の人間の個人ブレーだと断定する人がいるが、物事の正

邪は新旧を越えて考えなければいけないことだと思う。

法門の上で真剣に思考し、退廃した現実を、今日の自分に便利だからと肯定して割り切ってしまうということだけはしないでもらいたいと思います。

③

最近「仏生」の百十七号に「世雄偈の読・不読について」という論文が載せられ、御住職より贈呈、恵送していただいた。

読ませていただき、答えを先に決定し、文章を作った感じで、その内容をそのまま受容することが出来ぬ為、その迷妄を破して置きたいと思う。

又、この論文より先に、種々御批判がありましたので、文章中合わせてそのことにも触れさせていただこうと思います。

当流行事抄の正しい読み方

当流行事抄（学林版六卷抄 301P）

（前略）大覚抄の中に方便品の長行をも習い読む

べしと言うのは即ち廣開の長行を指すなり。其の間に偈頌ありと雖も比丘偈の長篇に望むれば其の前は通じて皆長行と名づくなり。

このように示されている後半の部分は、

淺識の者は、方便品の十如是迄が、經文の形式によれば長行であるというだろうが、大覺抄の長行とは、廣開三顯一を表している長行の部分のことである。この長行の中には偈頌（四度）があるけれども、比丘偈と呼ばれる（開結17P11行目）長篇の偈頌の前迄を方便品の長行と名付ける。

このように日寛上人は示されているのであります。

「仏生」には

方便品の長行とは、現在私達が常に読んでいる、一念三千の出処、略開三顯一の文であると考えるのが素直な読み方であると思います。

として、十如是迄が長行のことだと主張されていますが、富士門流においてはその主張はまちがいであって再考されるべきだと思います。

「世雄偈」と称し、表現する内容

つまり富士派においては「世雄偈」と称するもの

は、經文の索引の頭出しとして、「世雄不可量」の最初の世雄をとつて表現していることであつて、長行と偈頌が交互に重り合つて出ていく經文の「比丘偈」迄の約束の表現方法でしかないのであります。

「当流行事抄」中の文章からすると、長行という表現も、經文編集上のルールとしてのものではなく「長篇」という意味を表していると思われるのであります。

我々後世の者は、十如是の所が一念三千出処の重要な箇所ということで、無理矢理区切っていますが、「世雄不可量」ではじまる偈頌は、十如是迄の經文を改めて要約重複する所の偈頌であつて、略開三顯一の内容の所を無理矢理切っているだけのことであります。

方便品は助行だから略してもかまわない

方便品は助行だから、十如是迄で充分で、世雄偈迄読む必要等ないという主張する人がいます。しかし、寿量品も助行です。正行は題目だけであります。

日目上人の弟子日道上人は「御伝土代」（歷代上人全集一卷270P）に、元徳四年正月十二日、日興上

人が亡くなられる前年に、御遺告として口述筆記され、その中の一条に

一、天目房力方便品不可_レ読立大謗法事。
と、示されています。

宗史の中に、方便品、読不読の論争があつたことは、誰もが知ることですが、修行の上で、方便品を軽んじ、その為に読まないことは大謗法であります。そして、その理由が助行だからということであるならば、寿量品もいらない、題目だけで良いということになります。

このことと合せて、大聖人は、広より畧、畧よりも要を好むと仰せなのだから、そういうものは二の次のことだと

「今末法に入りぬれば余経も法華経も詮なし、但南無妙法蓮華経なるべし」

(上野殿御返事全集¹⁵⁴⁶P)

この御文を引用して、世雄偈を読むことに對してのはずれの批判をする人がいます。

もちろん題目が肝要であることは、あたり前のことであります。しかし、これは法門上のことであつて、身にあてた修行の上にあつては、順序次第の上

に、方便品、寿量品、題目の順序を踏むことが大切であるということを、日興上人は化儀の上に示されているのであります。

方便品を読み、三乗の教え、一切の教えを所破偈文として破折し「唯一仏乘」の寿量品につなげ、文上の寿量品より、末法一切衆生成仏の文底寿量品に致る為に、寿量品を所破所用とし、次に、釈尊の題目でなく、久遠元初、本因妙の大聖人の題目（正行）へと至る。

それぞれが関り合つて、文上から文底、在世の法華経から末法の法華経へと時節の転換がされていくのであります。

意味内容は違いますが、大聖人が教儀の上に「三國四師」をたてたことと同様のことと思うのであります。

方便だからとか、助行だから、世雄偈を読む読まないは次元の低い、つまらぬ議論だと冷笑されている人こそ、大謗法なのであります。

略開三、広開三だけに執着するものではない

広開三顯一迄の世雄偈を読む主張を「仏生」の中

では、

三周声聞の全部を救い終る広開三を読まなければ不十分だと云うのであれば、方便品を全部読むべきであり、中根の譬喩品、下根の化城喩品を経て、三周の声聞の授記が総て終る第九の人記品まで、全部読まなければ不完全であり――

と、主張されているが、これは当家において、方便品を所破借文の為に読むという法門上の主旨から大いに逸脱した議論だと思ふ。破り捨てる為に、一時方便品の文を借りる。もちろんそこには、十如実相、一念三千の出処が説かれていることは、まぎれもない。しかし、迹門十四品の肝心が方便品であるということは、方便品が、十方仏土の中に唯一仏乗の教法は、この法華経なんだということを、名実共に示している御経だからであります。

法華経以前の経の体外の方便をすてて、体内の法用方便、能通方便、秘妙方便を明らかにする。中でも、三乗即一乗の秘妙方便を明らかにし、本門寿量品につなげることが、方便品読誦の大切な意味なのであります。

加えて、方便品は四一開会の

教に約すれば三乗即一乗

行に約すれば汝等所是菩薩道

久に約すれば二乗作仏

理に約すれば諸法実相、四仏知見

の、法の下の平等が説かれ、「唯一仏乗」迄経文を読み広げることによつて、広開三の意味だけに固執し、広開三だけを中心に考えているのではなく（逆にいえば、十如実相の為にだけに方便品を読んでゐるのではないのであります。）方便品を読むということは、これだけの意味があるんだということが深まるように示されているのであります。

広開三だけにこだわるならば、当然人記品迄読むことは余儀ないことでしよう。しかし、当家法門の方便品読誦、所破借文の深意に即して考えれば、当然「比丘偈の前迄」ということなのであります。

（略開三は、世雄偈にしばらく入った「則生大歡喜」開結164P11行目の偈文の終り迄続く）

大石記の内容について

日興上人、日目上人の、出家の師匠と弟子の間柄で、師匠が世雄偈を唱えなかつた事を、ことこまか

に、揚げ足取りの様に破折するでしょうか。私は、当然軽い失策の様に、後世に残し、その戒の要点だけを明確にしたいと思います。

僧侶の場合は、どちらかといえば、正確に暗誦することを目標とさせられます。しかし大学女房はじめ在家の者は暗誦しなくても、クセのない、正確な勤行が望まれます。

ならば、小僧が自我偈さえも読めないことと、大学三郎女房はじめ、一切の信者さんと同例に考えること自体、それは無意味なことなのであります。まして御経の憶えが悪いことと、日尊師が落葉に目をやつて日興上人が破門にされた、それほど厳しい方が、世雄偈を略したぐらいだからたいした御経ではないという主張は、まったく信心修行の厳しさと意味が違うことであります。こじつけといわざるを得ません。

曾谷殿に対する勤行指導

大聖人が、曾谷入道に、建治元年（文永十二年）三月に与えられた短い御書は、入信十五年目の年にあたり、又亡父の十三回忌に寄せて御供養されたこ

とに對する、取り急ぎの返事と思われる御書であります。そのことを裏付けけるものとして、この曾谷入道御返事の内容は、一ヶ月後の四月に示された法蓮抄と御書の内容の項目が極めて似ているからであります。故にこの御書は法蓮抄を要約した、取り急いだ御書と判断してまちがいないと思います。

さてこの御書（全集一〇二五P）に

方便品の長行書進せ候先に進せ候し自我偈に相副て読みたまうべし

と示され、つまり法蓮抄と合わせて拝すると理解しやすいのですが、曾谷殿は、入信して、父が亡くなつてから、毎日修行として、父の追善の供養として、十三年間、自我偈を読み続けて来た。その功德修行の姿を誉めておいでになっている。

しかし、法蓮抄の中において、曾谷殿は、当時法蓮日礼（ひかり）として出家している方であるにもかかわらず。

（全集一〇四五P）

今法蓮上人の送り給える諷誦の状に云く「慈父幽靈第十三年の忌辰に相当り妙法蓮華經五部を転読し奉る」等云々

と述べ、一部読誦の姿に注意もされていない。又、

(一〇四七P)

彼の諷誦に云く「慈父閉眼の朝より第十三年の忌辰に至るまで釈迦如来の御前に於て自ら自我偈一卷を誦誦し奉りて聖靈に回向す」等云々。

と示され、この二つの修行の形体を永年に恒つて、何も注意することはしていない。そればかりか、このことを誉めていらつしやる。

これと同じ様に、他の信徒の人々に対しても挙げれば切りがないと思われるほど、一律平等な形で、「勤行はこうして」ということは、まったくされないように思える。

折に触れ、大聖人の判断と、相手の機根に合せて、判断し指導されたのであろう。しかし基本的には、大聖人御自身の行体行儀を規範にして導かれたものと思われる。

今日の日本社会では、文盲者がいるわけでもなく、一律平等に一定の基準や規範を決めることが簡単に出来る。故に今日の時代から、当時の檀越の一人を取り挙げて、こうだったのだから、今日もこれだいいという論はなりたたない。

このことの一つの証しとして、大聖人は、三月付

けの曾谷入道殿御返事の文頭に、方便品長行の經文を自ら書き写し、加えて誦誦する様に、と導かれてゐる。

「仏生」には(17P)

自我偈の重要性を法蓮抄には「毎朝誦誦される自我偈の功德は唯仏与仏、乃能究尽なるべし。夫れ法華経は、一代聖教の骨髓なり。自我偈は二十八品のたましひなり」(全一〇四九P)と絶讃されておられ、世雄偈一卷よりも、方便・自我偈を四度読む功德の方が遙に勝れているからであります。と主張されているが、先にも示した様に、勤行修行というものは、勝劣の勝抜合戦などではない。南無妙法蓮華経を根本とするにも、逆次の絶対を立てるたて方と、順次の相対を立てるたて方があるが、修行は順次の相対の立場の上になつたつてるのであります。

世雄偈は方便、自我偈より大事な御経であると云う程の意味が無い(仏生17P)

といわれるが、法門上と、修行上をたて分けることなく、混乱して主張していると思えません。

ならば、方便品は自我偈よりも大事な御経ではな

いから読まない。自我偈は題目よりも大事ではないから読まない。ということになってしまふのであります。

又、

世雄偈一卷よりも方便、自我偈を四度読む功德の方が遙に勝れる

という説も、題目は法華經一部読誦に勝る——というぐらいですから、何も自我偈を四度読む功德よりも、題目を四度唱えた方が、もつと良いということになってしまいます。全ては、法門上と修行上の混乱であり、回数や時間の長短を持ち出す問題ではないのであります。

世雄偈の中に、日蓮大聖人の仏法の何が表わされているのか、何の為に読誦されていたのか、その要旨が我々の毎日の勤行修行の中に取り入れられ、それを行体とすることが大切なのだ、ということ为主張しているのであります。

七百年程の歴史の中で、明治頃迄の経験者、歴史の証言者がいたとしても、たかだか百二十年間位の視野でしかありません。

身延との関りの中に身を置き乍、戦争や、社会の

動乱の中に身を任せ、疲弊していた宗門の姿の中で、日寛上人の時代や、日興上人日目上人の時代を、軽く推し測ることは出来ないことであります。考察することは出来ても、軽々しく一言に否定することは謹しむべきことだと思ひます。

それをすれば、増上慢の誇りは免れないのではな
いかと思ひます。

日興上人が何故世雄偈を端折ったのか。

私はこのことに予断を持つて答える資格がありません。けれども、いただいた御批判の中に、

。謗法嚴戒の日興上人が、略すのはおかしい

。謗法嚴戒の日興上人でも略していただから略してもかまわない。

。「富士の流儀聊も先師の御弘通に異せざること」の日興上人が自ら破ったということならば必要のないこと

との御意見がありました。

何か世雄偈を否定する為に総動員をかけるような屁理屈で、本末顛倒ではないかと思ひ、答える資格はありませんが、この項目を挙げた次第であります。

御経を誦する時に、段階を踏んで省略すること
があります。

一、方便品十如是・世雄偈・寿量品長行・自我偈・
題目

二、方便品十如是・寿量品長行・自我偈・題目

三、方便品十如是・自我偈・題目

四、自我偈・題目

五、自我偈・引題目

(朝・夕の五座・三座を省略する時も、自我偈だけ
をくりかえして略すとかする。)

このように段階的に略す時、残される御経は内容の
重要なものからということになります。

この意味からすれば、世雄偈が一番に略されると
いうことは、いたしかたのないことだと思います。

しかし、過去の「芝川」にも書きましたように、
世雄偈を略しているという意識、元来は世雄偈を読
まなければいけないんだという意識、読んでいない
けれども、ここにこういう意味が含まれているんだ
という意識を持って、御経を拝読することが大切だ
と思います。

まったくそんなものは必要ないんだ、と断定して、

日蓮正宗の信仰修行には不必要な繁雑なものなんだ
と思考しているのとは、まったく内容において違う
ことなのであります。

丑寅勤行の時だけでも、時の歴代貫主が読んでい
た時代であれば、信仰者は皆、世雄偈を略している
という意識、本来は拝読するんだという意識を嫌が
応でもみんなが持っているわけであります。私は、
そういう基本認識が大切なんだと主張しているので
あります。

日興上人御一人の勤行でなく、多数の弟子等と勤
行することが、ほとんどであつたろうと想います。
当時の状態を知らぬ者が、謗法に厳しい日興上人な
らば、世雄偈を略さないでするはずではないかと、
批判しなじること事態がおかしなことだと私は思ひ
ますし、読まないことが謗法でないならば読まなく
ても良いのではないかと、読んでいた意味を考えない
姿勢自体が信仰者としていかなものかと思うので
あります。

勤行のあり方

法源寺様より教えていただいた。丑寅勤行におい

て世雄偈を読み続けられていたということも、全国末寺の勤行の仕方が、てんでバラバラであったということも、創価学会が出現して、勤行式の統一を、丑寅勤行の形にならつて、五座、三座式とし、世雄偈を排したということも、なるほどと思われるものがあります。

戦後の荒廃で、勤行どころでなく、雑事に追われ、勤行もしなかった僧侶もたくさんいたと思う。又、今日でも、寺の日程として決めている勤行の時間に、在勤者にさせれば、自分自身の勤行はしなくても良くなってしまうという状態があたり前であり、平気になっている。

寺の奥さんも、庫裡の仕事（台所、掃除、洗濯、住職の身の廻りのこと等々）をすることが、勤行することと同じことだという屁理屈を通して、忙しい時は、わざわざ勤行しなくても良いと思っている住職も奥さんもあります。

こんな感覚で、プライドだけは信徒よりも上だと思っているから、仏法の前に一人の信仰者としての真摯な心を持っているとは思えない。

今日の勤行式の形体さえ、創価学会主導で出来上つ

たということも、むべなるかなという感じがする。

「くずし」の読経について

勤行の読み方にくずしといわれるものがある。書道でいえば、字を正確に書くことが、楷書といい、くずしは草書と称す、さしずめこの草書を、御経の世界ではくずしと称するのであります。

しかし、今日正しくくずせる者はなく、早口読みがほとんどとなつてしまつてゐるわけであります。俺は正しくくずし読みが出来ると主張する人でも、方便、寿量、自我偈と同じ調子で、くずし読み出来る者はなく、慣れている所は早く、慣れていない所は遅く、一人ではくずせても、多人数では一致してくずせない。人それぞれにくずし方がある。ということは、正しくくずしになつていないということであり、ただの早口経だということであります。又、くずしとは、ただ早く読む為のものでなく、くずしてもゆつくり読めなければ、正確なくずしとはいえないということを教えられたことがあります。

本山での百人を越える集団が、義務教育の為の学校に通い乍、特別専門的な御経の練習や、作法を教

えてもらうこともなく、見て聞いて憶えて成長して行くという、習うより慣れるで、それはそれで良い面もあると思う。しかし、「門前の小僧、習わぬ経を読み」という諺があるが、私は体験的に思うことは、正確な御経は、門前の小僧には読めないと思う。一節一節、口伝で復唱してこそ腹にたたきこまれるもので、何年も信仰しているはずの信徒のほとんどが不正確なクセ読みになっているのを見ると、御経とはそういうものだと思う。楷書の御経が読めなければ、草書の御経は読めないけれど、楷書の御経が読めても、草書の御経は読めないものである。きちんとしたくずし方の訓練を統一的に多人数に伝へ練習してこそ、そのことを修得することが出来るわけである。

そう考えてくると、くずしの御経を正しく伝承する者は、今日の日蓮正宗の中には無いといつて良いと考える。もし個人的にその能力を持っていたとしても、多数の人々に伝承出来ない、又しなければ、それは意味のない自己満足のわけのわからないものとなってしまうものといえる。

私は、早口の御経はもちろん、くずしの御経も、

信仰する上に特別必要ないと考えます。早口で御経を唱えている人々が、僧俗問わずほとんど御経をまちがえているからであります。くずすあまり、早口のあまり、原文がなんであつたかわからなくなつてしまつている人々が多いわけであります。

楷書の正確な御経が明確に唱えられれば、それが一番好ましいことだと思ふのであります。

現在、早口で御経を唱える為に、ほとんどの人が、短距離競争のスタートダツシユの様に、

妙法蓮華經方便品第二爾時世尊………

このようにはじまり、終りは急ブレーキのように
以我令衆生 得入無上道 速成就 仏
身——。

このように、はじまるぞ——、終るぞ——という
個々バラバラのパターンで展開している為、御経の
終りに来るとそろわない状態になつてしまうのであ
ります。

御経は元来、雨垂れ経の一本調子でなければなら
ないわけですから、

妙法蓮華經方便品第二
得入無上道速成就佛身——

と、御経のふりがな通りに読まれて、あたり前のことだと思ふのであります。

基本となる、題目三唱ですら、浪花節のように力む方、妙に延す方、ナンニョーとなる方、それぞれ、他人よりりっぱに見せよう、重々しく見せようとする余り、自分は南無妙法連華経と唱えているように思つていても誰が聞いても、南無妙法連華経と聞こえない題目を、信者以前に、僧侶が唱えてしまつてゐるわけであります。

嘘か誠か、自分の題目をテープレコーダーにとつて、自分で聞いてみれば、すぐ分ることと思います。観念文にしても、御経が終るや否や、まるでクイックターンのように、次の座の勤行がはじまり出す僧侶がいます。いったいどこで観念をしているのか分かりません。

このように勤行は、小僧の時から永年やつて来ても、自分が常に注意し、戒めなないで放つておけば、皆崩れていってしまうものであります。

先の芝川で示したように、勤行様式は、日蓮大聖人の仏法とはこういうものなんだということを示す、看板のようなもので、唯、化儀だからと軽々にいえ

るものではないはずであります。

戦争があるうが、貧しさがこようが、元々はこうだというものがなければいけない。時の貫主によつて、理由なく済し崩しで改変されるようなものではないのであります。

「仏生」(17P)には

今急にその様に改めなければならんものとは思いません。

と、書かれています。では過去にどれほどの世雄偈を略して良い理由があつたのでしょうか。全ては凡夫の怠惰な性を原因にして改変されて来ただけのことなのであります。

大聖人のされていたことに帰るのに、急にも、序々にもないわけで、気付けば直すということが、尊い姿勢だと思ふのであります。

略開広開のこと

私は、略開三の読みの解釈で、芝川6号に——ほぼ略して——いう表現を使い、芝川7号の文末に——言葉の意味が重複する為、ほぼを削除する——と書きました。

方便品は広↓略のあたり前の順序ではなく、略↓広の順序に經文が説かれているわけでありす。

略を説き、改めて衆生の為に一歩もどつていねいに広が説かれる。これが広開三顯一の部分にあたるわけでありす。

広は全体であり、略は広の中でも中心的なあらましにしぼつて述べられているということでありす。再度、まぎらわしく表現した点を謹んで訂正いたします。

こういった略↓広の順序もあつて、世雄偈は疎んぜられ省かれる扱いになるのではないかと思ひます。

世雄偈読誦の必要

今迄述べて来ましたように、

。大聖人の御在世時代の信徒勤行式の不統一

。資料のとばしき

。法門と修行（勤行式）の混乱

又、ここには書きませんでした、

。僧侶が小僧のように一から習うという、めんどろくさがる気持ち。

。信徒の混乱。

。今迄これでやつて来たんだから、波風をたてたくない。

これ等を混ぜて、読む必要がない。読まない方がよい。読むな。ということになつてくるわけでありす。

数少ない資料でも、辿つていった時、大聖人は、それを修行としてされていたということだけは事実として認めなければいけないのであります。

大聖人が読まれていた意義は、大聖人の弟子として、読むか、読まないかだけの皮相的な面だけで考えるのではなく、内容を深く考えなければいけないのであります。読む必要がないと、輕薄に考えている人々は、とうてい深い点から考えているとは思へないのであります。

再度、「開目抄」に見る広開三の意味

開目抄（全集208P）

法華經・方便品の略開三顯一の時・仏略して一念三千・心中の本懷を宜べ給う、始の事なればほととぎすの初音を寢を惚れたる者の一音ききたるが・やうに月の山の半を出でたけれども薄雲の・をほ

へるが・ごとく・幽^{かそ}かなりしを舍利弗等・驚いて
諸天・竜神・大菩薩等をもよをして諸天・竜神等・
其の数恒沙の如し仏を求むる諸の菩薩大数八万有
り・又諸の万億国の転輪聖王の至れる合掌して敬
心を以て具足の道を聞かんと欲す等とは請ぜしな
り、

つまり、釈尊は方便品の略開三頭一の中で、十如是
を述べ心の中の本懐の一端を宣べたけれども、はじ
めてとつぜんにいったものだから、衆生は、ほとと
ぎすの季節のはじめの声を、寝呆気た状態で、一声
だけ聞いたようなものであつた為に、聞いたのか聞
かないのか分からない状態であつた。又、月が山の
端に半分だけ出たけれども、その出た月にも薄雲が
かぶさつたようで、出ているのか出ていないのか分
らないほど、かすかにしか見えない。しかし、智恵
第一の舍利弗等は、十如是だけを聞いて、驚いて諸
天、竜神、大菩薩等と呼びかけて、自分達にもその
ことが具足していることを、もつとくわしく聞かせ
てくれと仏に求めた。

このように、広開三頭一に入っていく意義を示し
ているのであります。

我々も、寝呆気たような、薄雲がかぶさつたよう
な愚痴の衆生であります。

自分達が読んでいる方便品が、何故「所破借文」
なのか、どのように寿量品とつながって行くのか、
ということを世雄偈を通して考えて行かなければい
けないのであります。

皮相面だけで、世雄偈を読む読まないというので
はなく、何故読むべきなのかという意味内容の土俵
に立つて考えてもらいたい。このことは、読まない
人であつても考えなければいけないことなのであり
ます。

「大石記」の中にも、
大貳阿等を始めとして懷中して稽古して読み給ふ
なり。

と示されている所を見る時、高僧の方と想像出来る
のでありますが、こういう姿が先輩後輩の年功序列
にうるさい僧侶の世界において、もつとも大切なこ
となのではないかと思うのであります。先に出家し
たということは、縁も徳もただならぬものがあると思
います。しかし信仰心も先輩、修行の中味も先輩、
成仏を遂げるのも先輩・人格も先輩・かといえは、

決してそんなことはないのです。過去現在未來の三世常恒の中の、現在世界だけの先輩後輩の序列にこだわり、信仰を考えていたならば、信仰を正しくとらえることは出来ないはずであります。信徒には、「信心は信仰歴じゃあないよ」という僧侶が、先輩後輩だけを寄り所にした考えでは、信心の自滅になると思います。

私はこの「大石記」に示された、まず隗より始めよ、との姿勢が信仰の本来あるべき姿であり、先輩の姿であると思う。

このことから考えた時、

。読んでいる人が少ない。

。読んでいる歴史がが少ない。

このような多数決の理屈は、あるべき修行の姿を決するには、何の役にもたないことなのであります。

法臘年数による経験も、関係のないことなのであります。

少ない資料であっても、問題は多数決ではなく、自分がこれらの資料を通して、信仰者として、どういう問題意識を持つかということだけであると思います。

私は、これらの資料を通し、自ら読み、僧俗の別なく、他も読むべきだと思う。しかし強制すべきものではなく、信仰は個々の心から発したものでなければいけないことも充分分っているつもりであります。

大石寺の僧等も、早口の勤行で心を込めることなく、御開扉や、丑寅勤行をしていないで、心を込めてゆつくりと、楷書体の明確な勤行をしていたきたいと思う。そして、信徒の間違った勤行の姿、自分達のまちがった勤行の姿に気付かれんことを希望します。

④

はじめに

今迄三回にわたって、日蓮正宗の勤行について考えて来た。

中でも「世雄偈」のことは、久保川法章師の「仏生」においての、主張と反論があった為に、はじめに議論のかみあう形で、反論を書かせてもらった。少ない資料の中で、この「世雄偈」に関する議論

のポイントは、これで出尽くしたのではないかと、私は思っている。

私は、「開目抄」「月水御書」「曾谷殿御返事」「大石記」「当流行事抄」の文献で、今日の我々が、世雄偈を読誦する為の理論背景としては、充分だと考えているのだが。これでは、内容としてもあいまいで、数として不充分だと考える人に対して、新に偽作創作して、文献を作るわけにもいかないのだから、これでは議論を尽くすことは出来ない。それらの方々は、文献の内容に入ることなく、多数決で大勢が決まれば、内容に関係なく、自分は考えることなく、議論が尽くされたと考えるのかもしれない。自分は考える能力がないから、頭のいい人が話合ってくればいいという感覚であろう。しかし、何事についても、これでは意味のないことだと思う。

こうした、賛否、好嫌、一部のスタッフの議論ではなく、日蓮正宗は化儀即法体ですから、化儀の形体自体が大聖人の仏法（心）を表わしているという思考に立つて考えなくてはいけないと思う。「世雄偈」を読むか、読まないかということは、化儀（形）に限定されたことではなく、法体（心）に関わる大

切なことだと思っております。

こうしたことも含んで、今迄の議論の中で、「世雄偈」を方便品十如是迄の御経の付録の様に考え、軽んじている人々が陥っている誤解というものは、法門上の考え方と、修業上の考え方の混乱にあるのではないかと、理解するにいたった。

法門・修業の混乱

宗祖の大願は一切衆生の成仏であり、この法を、法華經文底、久遠元初本因妙の南無妙法蓮華經と表現されたのであります。

ですから

「上野殿御返事」

今末法に入れぬれば余経も法華經もせんなし、只南無妙法蓮華經なるべし

「報恩抄」

有智無智をきらわず一同に他事をすてて南無妙法蓮華經と唱うべし

「曾谷入道等許御書」

法華經の中にも広を捨て略をとり、略をすてて要を取る云々

の、題目正意、一言撰盡の教というものは絶待妙の世界にたてた妙法であり、勤行修行というものは、相待妙の世界にたてた妙法なのであります。

絶待妙・逆次・一言撰盡・仏の立場

相待妙・順次・半偈成道・衆生の立場

勤行が、

所破借文（方便） ↓ 所破所用（寿量） ↓ 題目肝心

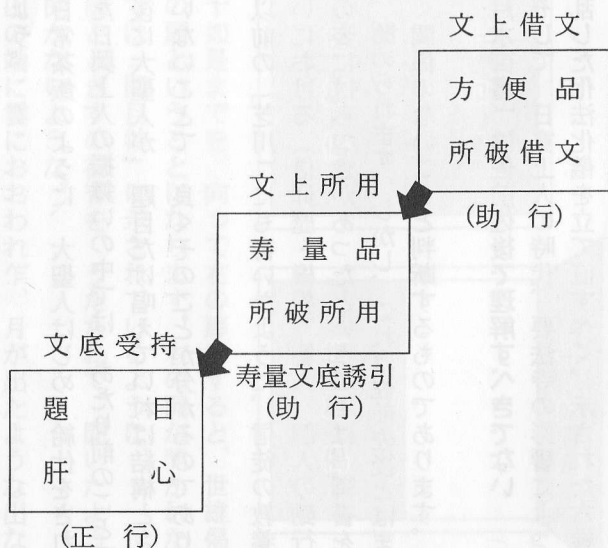
このように相待して、文底に至る姿を見れば

相待妙・順次・半偈成道・衆生の立場

ということが良く分かると思うのであります。

このように、まず方便の門を開き、寿量の門を開き、

真実の妙法を受持する。釈尊一代の説法を凝縮したものとして、迹門方便品、本門寿量品を用いて、文底題目にいたる手順が当門の勤行修行の所作であります。



法門上の逆次の絶待を主張するのであれば、当門に勤行修行はいらない。題目だけ唱えていれば良いということになってしまふのであります。

上古において、「方便品読不読論争」が起つていますが、他門からも、同門からも、無得道の方便品を、大石寺が読んでいるのはおかしい。との議論に對しても、代々の貫主は、方便品読誦論を、順次の次第、凡夫修行、勤行修行の立場を持つて主張しているわけであります。

仏の側からすれば絶待の一言の題目。衆生の側からすれば、相待の方便、寿量、そして題目にいたる、となるのであり。上古において、このような議論をふつかけて来た方々も、法門上と、修行上の混乱があつたのであります。

佐前佐後の教義変化と勤行式の変化の有無

月水御書は佐前の御書であります。そして冒頭にあげた「上野殿御返事」「報恩抄」「曾谷入道許可書」等は佐後の御書であります。

しかし、勤行修行の姿に、発迹顕本を通して法門が変化されると同様の変化が示された形跡はないの

であります。

佐後に方便長行を否定している事実もなく、日興上人、日目上人が読まれていたことを明確に物語る「大石記」又、大石記を書かれた第六世日時上人の前後においても、当然「世雄偈」が読まれていたでしょう。

日常茶飯のように、大聖人はじめ、給仕をされていた日興上人の振舞いの中では、あたり前のことで、佐後に大聖人が、題目だけ唱えていれば結構とされていけないことで、良くそのことが分かるのであります。

以前の「芝川」にも書いたように、信徒の教養の違いにおける（信仰歴・機根）個人、個人の勤行修行の姿にばらつきがあつたということは、御書を通して、認められます。しかし、これは佐前佐後とはまったく関係のないことと判断するものであります。

「月水御書」は佐前佐後で理解すべきでない

そして、日寛上人の時代、要法寺の影響によつて混乱した化法儀を立て直すべく、示された六巻抄中の「当流行事抄」の中に、改めて、佐前御書であ

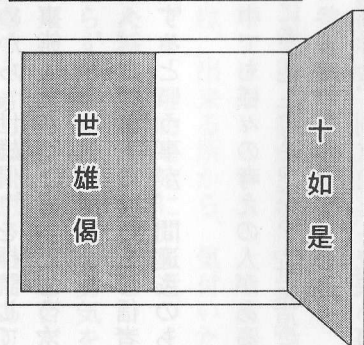
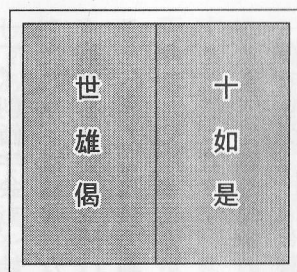
る「月水御書」を引用され、

大覚抄の中に方便品の長行をも習い読むべしと言
うは即ち広開の長行を指すなり

と、示し、一般には、「世雄偈」のような形体の經
文を長行とはいわないけれども、当門家においては、
「世雄偈」を長行と呼称することを示され、加えて

十如の文にすでにこれは一念三千の出所なり。故
にただこれを誦すれば、其の義則ち足りぬ。然り
と雖も、略開は正開頭に非ず。故に一念三千猶未
だ明了ならず。故に広開に至るなり。

と示され、略開だけでは、正開頭ではないから、
広開と合わせて、正しい開頭といえるのであり、そ
れ故に読誦しなければいけないと示されているので
あります。



十如是までを、向つて右の扉とすると、世雄偈は
左の扉ということになります。右の扉が開かれただ
けでは「開目抄」に示されているように、
ほととぎすの初音を、うたたねで、聞いたような
聞かないような。

山の端に雲におおわれ乍、月が出たような出ない
ような

仏の側から見れば、明確に一念三千の出処として
説かれていても、衆生の側から見れば「開目抄」の
譬の通り理解出来ない。まさしく、左右の扉の右だ
けの片開きということであつて、正開頭ではなく、

『権開顕』ということになるのであります。

もとより勤行修行は仏の側からのものではなく、あくまで衆生の側から行う修行であります。絶待でなく、相待の世界に立てられる修行であります。であれば、当然衆生の側より広開の扉を開いて、正開顕にして、次の寿量品にいたることが、当門の法門にかなった勤行式といえるのであります。

勤行の変遷

「芝川」6号、勤行について考える(一)6Pに、今日の五座三座形式は、大石寺諸堂が建立されて行く経過の中で形成されて来たものであらう。ということを上上げた。

ですから私は、勤行修行の原形は、方便品(十如・世雄偈)寿量品(長行・自我偈)題目であつて、創価学会の発生によつて、それ迄、各末寺バラバラになつていたことにクレームをつけられ、当時の丑寅勤行の五座を原形とし、世雄偈を抜いて、朝五座、夕三座という形にしてしまったわけであります。

昭和31年に入信した人の証言をここにあげておきます。

昭和31年、私が入信して間もない頃、岡崎市勤労会館に於いて、柏原ヤス氏が、指導会に於いて。朝晩の勤行について話しがあり。創価学会員は貧しい人と病人ばかりだが「日蓮正宗では、皆さんの勤行より、もっと長いお経で、これでは仕事に差支うために、本山へ交渉してお経を短くしてもらつたのです。」と、此の話をきいて、お経まで短く出来るとは、創価学会とは凄い団体だと驚いて居たが、30年余過ぎて、現在私は正信の信徒として、又、『世雄偈』を拝読して居ますが、此の勤行こそ日蓮正宗の信心だと強く自覚して居ります。創価学会も、始めから『世雄偈』を拝読して居れば、現状の様な事態も無かつたものと思う次第である。

日蓮大聖人様の訓へ。日興上人の修行を、信者の考えで簡単に変更するという事が、間違えののもと思ふ者です。

直、正信の僧俗の中でも様々の考えの人がある様ですが、正信を真に考えて下さるなら『世雄偈』をろうろうと続けて参り度いものです。

真の正信とは、創価学会、創立前迄、立戻る事

と思えます。

むすび

大切な十如是や自我偈を五回やったほうが功德がある等という回数功德論ではおかしいのであります。最初に示した通り、方便は助行で、世雄偈はその付録だと、蔑視するのであれば、寿量品も助行であります。自我偈も重ねて説いている付録ということでしょうか。

ですから、そういった考え方は、仏の側からの絶待の法門的見方と、衆生の側からの相待の修行・破折の見方の混乱混同から起るまちがいであると思います。

いずれにせよ、多数決や好嫌で決める問題ではなく、誰人も法門の内容にたつて考えて行かなければならない問題だと思ふのであります。

現代の僧侶は、たかだか30年か40年、それがもし70年間僧侶としてやって来たとしても、その生活の中で見て来た事柄だけで、それが宗祖の教えであり、化儀であり、伝燈法門だと考えてしまうのであります。宗祖の時代と違うことを、30年も40年もやって

いれば、捨て難い情が湧いて来て、それも伝燈になって既成事実の力を得てしまうのであります。

懐古趣味だとか、復古主義、教条主義だとか、今そんなことをしている時ではないということを主張する人がいますが、私は、出来る所から、氣付いた所から、真の姿に一步でも、理由を定にして近づくことが出来れば、たとえ将来に訂正があつたとしても、現在の姿にこだわらず、しがみつかず、勇氣を持って、今までやって来た、まちがった自己を否定し、あくまでも法を尊重すべきものと思うのであります。それが依法不依人であります。

今、そんなことをしている時ではない——。じゃあ何をする時ですか？

人間一人一人、御金の使い方、時間の使い方、心の使い方、身体の使い方等々、皆違うように、その人自身が、信仰者として、今何をすべきか？ということを考え、実行して行くわけであります。

今の自分に出来ることを、日興上人の末弟として恥じない生き方を模索し、心懸て一步でも精進して行くことが大切なことだと思ふのであります。

私は逆に、そういう質問をする方がいれば質問し

たい。

そんなことをしている時ではないという方は、今何を、どのように、法に恥じない生き方を模索し、心懸ていますか？

ということを開きたい。

所詮人間は、色々なことを同時進行で出来ない為に、出来ることから心懸けて、生きて行くことしか出来ないのではないか。その目的観が大きい小さい、高い低いで、その人間の生き方、生涯に違いが出るだけのことだと思えます。

せつかく、この妙法の基に信仰し、出家できたのだから、集団の群集心理に身を任せることなく生きたいと思う。

『世雄偈』を読まなければ謗法だという考えはまちがいだと思う。

『世雄偈』を読めば、成佛の得益があるという考えもまちがいだと思う。

しかし、正行題目に通ずる所破の修行として功德を積むことに間違いはなく、そのことを無下に助行だ付録だ形式だと意味の無いことのように軽く考え

挙げ句の果には必要がないとすることは謗法であります。

新 () の 経 済 学 に つ いて

[illegible][illegible]

○阿波志一ノ讀まはけは、ハハ、カカ

正信に自宣めたる時、各等々人に通告した

[illegible]

このように注意して、皆々

何万人もの人が仲立を唱へてゐる。前記の如く、

[illegible]

勤行はん 自令が満するたためにすゝめではな
い。たたくことにはな

あつた。恒年三つと、自命で、正しく読み、正しく

一 諸人は和して、伊を喝するやうに努力し
（これを「た」と思ふ）。

○何故新しき全書を渡すのか

[illegible][illegible][illegible][illegible]

訪みの行旅性より、妙喜寺に依拠して、
 たのめあり、妙喜寺に依拠して、
 訪みの行旅性より、妙喜寺に依拠して、

○我々が大事業と別に聖本と作、この二つが

創価学会と同じように聖書を作つたと思ふ人が、^三「三かもし水ませんが、あゝこれも大聖人の御心」

(三) 西に、鐵の獨をばかて、この私利私欲をも
あつて、牧口^{ウチノカミ}とちよける下心がある聖本と

大聖人の仙話と云ふのは、一三にすぎぬであらう。こゝと孝道に理解して貰ふたいと思ふます。

○金沢のみの役名と舞台の所

抑至には、読みなべて一掃置て置く所か。
 読たさんありきす。昔々を本はこい、う所と棒
 線ふかり及名として表現し、最初からの最長と雨

それが落ちるやうに、同時にリスムで押さへて置く。さうして、
 線路で示してある場所を一路、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{8}$ 、 $\frac{1}{16}$ 、 $\frac{1}{32}$ 、 $\frac{1}{64}$ 、 $\frac{1}{128}$ 、 $\frac{1}{256}$ 、 $\frac{1}{512}$ 、 $\frac{1}{1024}$ 、 $\frac{1}{2048}$ 、 $\frac{1}{4096}$ 、 $\frac{1}{8192}$ 、 $\frac{1}{16384}$ 、 $\frac{1}{32768}$ 、 $\frac{1}{65536}$ 、 $\frac{1}{131072}$ 、 $\frac{1}{262144}$ 、 $\frac{1}{524288}$ 、 $\frac{1}{1048576}$ 、 $\frac{1}{2097152}$ 、 $\frac{1}{4194304}$ 、 $\frac{1}{8388608}$ 、 $\frac{1}{16777216}$ 、 $\frac{1}{33554432}$ 、 $\frac{1}{67108864}$ 、 $\frac{1}{134217728}$ 、 $\frac{1}{268435456}$ 、 $\frac{1}{536870912}$ 、 $\frac{1}{1073741824}$ 、 $\frac{1}{2147483648}$ 、 $\frac{1}{4294967296}$ 、 $\frac{1}{8589934592}$ 、 $\frac{1}{17179869184}$ 、 $\frac{1}{34359738368}$ 、 $\frac{1}{68719476736}$ 、 $\frac{1}{137438953472}$ 、 $\frac{1}{274877906944}$ 、 $\frac{1}{549755813888}$ 、 $\frac{1}{1099511627776}$ 、 $\frac{1}{2199023255552}$ 、 $\frac{1}{4398046511104}$ 、 $\frac{1}{8796093022208}$ 、 $\frac{1}{17592186044416}$ 、 $\frac{1}{35184372088832}$ 、 $\frac{1}{70368744177664}$ 、 $\frac{1}{140737488355328}$ 、 $\frac{1}{281474976710656}$ 、 $\frac{1}{562949953421312}$ 、 $\frac{1}{1125899906842624}$ 、 $\frac{1}{2251799813685248}$ 、 $\frac{1}{4503599627370496}$ 、 $\frac{1}{9007199254740992}$ 、 $\frac{1}{18014398509481984}$ 、 $\frac{1}{36028797018963968}$ 、 $\frac{1}{72057594037927936}$ 、 $\frac{1}{144115188075855872}$ 、 $\frac{1}{288230376151711744}$ 、 $\frac{1}{576460752303423488}$ 、 $\frac{1}{1152921504606846976}$ 、 $\frac{1}{2305843009213693952}$ 、 $\frac{1}{4611686018427387904}$ 、 $\frac{1}{9223372036854775808}$ 、 $\frac{1}{18446744073709551616}$ 、 $\frac{1}{36893488147419103232}$ 、 $\frac{1}{73786976294838206464}$ 、 $\frac{1}{147573952589676412928}$ 、 $\frac{1}{295147905179352825856}$ 、 $\frac{1}{590295810358705651712}$ 、 $\frac{1}{1180591620717411303424}$ 、 $\frac{1}{2361183241434822606848}$ 、 $\frac{1}{4722366482869645213696}$ 、 $\frac{1}{9444732965739290427392}$ 、 $\frac{1}{18889465931478580854784}$ 、 $\frac{1}{37778931862957161709568}$ 、 $\frac{1}{75557863725914323419136}$ 、 $\frac{1}{151115727451828646838272}$ 、 $\frac{1}{302231454903657293676544}$ 、 $\frac{1}{604462909807314587353088}$ 、 $\frac{1}{1208925819614629174706176}$ 、 $\frac{1}{2417851639229258349412352}$ 、 $\frac{1}{4835703278458516698824704}$ 、 $\frac{1}{9671406556917033397649408}$ 、 $\frac{1}{19342813113834066795298816}$ 、 $\frac{1}{38685626227668133590597632}$ 、 $\frac{1}{77371252455336267181195264}$ 、 $\frac{1}{154742504910672534362390528}$ 、 $\frac{1}{309485009821345068724781056}$ 、 $\frac{1}{618970019642690137449562112}$ 、 $\frac{1}{1237940039285380274899124224}$ 、 $\frac{1}{2475880078570760549798248448}$ 、 $\frac{1}{4951760157141521099596496896}$ 、 $\frac{1}{9903520314283042199192993792}$ 、 $\frac{1}{19807040628566084398385987584}$ 、 $\frac{1}{39614081257132168796771975168}$ 、 $\frac{1}{79228162514264337593543950336}$ 、 $\frac{1}{158456325028528675187087900672}$ 、 $\frac{1}{316912650057057350374175801344}$ 、 $\frac{1}{633825300114114700748351602688}$ 、 $\frac{1}{1267650600228229401496703205376}$ 、 $\frac{1}{2535301200456458802993406410752}$ 、 $\frac{1}{5070602400912917605986812821504}$ 、 $\frac{1}{10141204801825835211973625643008}$ 、 $\frac{1}{20282409603651670423947251286016}$ 、 $\frac{1}{40564819207303340847894502572032}$ 、 $\frac{1}{81129638414606681695789005144064}$ 、 $\frac{1}{162259276829213363391578010288128}$ 、 $\frac{1}{324518553658426726783156020576256}$ 、 $\frac{1}{649037107316853453566312041152512}$ 、 $\frac{1}{1298074214633706907132624082305024}$ 、 $\frac{1}{2596148429267413814265248164610048}$ 、 $\frac{1}{5192296858534827628530496329220096}$ 、 $\frac{1}{10384593717069655257060992658440192}$ 、 $\frac{1}{20769187434139310514121985316880384}$ 、 $\frac{1}{41538374868278621028243970633760768}$ 、 $\frac{1}{83076749736557242056487941267521536}$ 、 $\frac{1}{166153499473114484112975882535043072}$ 、 $\frac{1}{332306998946228968225951765070086144}$ 、 $\frac{1}{664613997892457936451903530140172288}$ 、 $\frac{1}{1329227995784915872903807060280344576}$ 、 $\frac{1}{2658455991569831745807614120560689152}$ 、 $\frac{1}{5316911983139663491615228241121378304}$ 、 $\frac{1}{10633823966279326983230456482242756608}$ 、 $\frac{1}{21267647932558653966460912964485513216}$ 、 $\frac{1}{42535295865117307932921825928971026432}$ 、 $\frac{1}{85070591730234615865843651857942052864}$ 、 $\frac{1}{170141183460469231731687303715884105728}$ 、 $\frac{1}{340282366920938463463374607431768211456}$ 、 $\frac{1}{680564733841876926926749214863536422912}$ 、 $\frac{1}{1361129467683753853853498429727072845824}$

② 読むに工夫をこらして下す。

新しく読む御経について

新二録の正本は、最初は、昭和五十九年の大聖人の御命日に出版された。

[illegible]

11. 5. 2011

[illegible]

方便品「最行は」世尊不可量
 一「はたは」世尊に「世尊といふ
 一」利尊といふ語こそありませ
 せん、然るにこの語こそありませ
 せん、甚だしく迷ひたることを
 他の方達、教に依りて説くこと
 自明なり、今も此世に壽命すべ
 きものあり、つたてて下すべし、
 而して下すべし、つたてて下すべし、
 何れも

あとがき

昭和五十九年、一冊の経本（「世雄偈」の印刷された）と、「経本作製のいきさつ」という資料が添えられたものが山口法興師から送られて来た。その時、私は、懐古趣味の復古主義の人だなあと、内心冷笑し、無視していました。ところが、縁あって、いつしよに米国へ信心指導の為十年余りの間一年に二回位いのペースで出掛けることになりました。広島、福山から東京目黒の妙真寺で、前日泊めて頂き、帰国した日に泊めて頂き、妙真寺での勤行、もちろん米国滞在中も「世雄偈」の入った勤行をいつしよにしなければならぬ状況になって行きました。最初は、良くこんなことをやるなあと思っていましたが、その内清々しい気持ちになって来て、これは仕方なくやるのではなく、何故やるのか勉強してその内容から考えてみようと思ひ立ち、「世雄偈」の解釈から、方便、壽量読誦の意味を、改めて勉強しました。すると、この「芝川」の中でも触れましたが五千人の増上慢の衆生が立ち去ることから、一大事因

縁、開示悟入の四仏智見と、より主体的に南無妙法蓮華經の題目がいかに大切かということが説明された経文であることが良く分りました。

正信会では、山口法興師の提議の直後、「正信会としては世雄偈を読まない」ことを決議しました。教区会で話し合われた時に、山口蓮興院・吉田輔道師は五十九年以前から山口師を通じて読んでいた為に「読みたい人は読んで良いんでしょ」と発言されたのを聞いた時点で、私は「山口さんに影響された復古主義の人間がここにもいるな」と内心冷笑していました。

しかし自分が自分の愚かさに気付いて、「世雄偈」を読もうと決断して、まず自分だけではじめ、最初は一時間以上かかったものが一回やることに慣れて三分位いずつ速く読めるようになり、三ヶ月かかって、三十五分位いで読めるようになった。その上で、正しい御経ならば自分だけがやるのではなく、信者さんといつしよにやっいていこうと考え、山口師の所へ今迄の考えを謝った上で、経本を売ってくれる様に願った所、世帯数分であれば無料でくれると言つて、送ってくれた。そして三ヶ月かけて「世雄偈」

に関する勉強会をし乍実際に読みはじめて行つたの
であります。吉田輔道師にも、電話で内心冷笑して
いたことを詫び、信者さんといつしよに読んでいく
ことを伝えた。

「世雄偈」を読むということで教区の他寺院へ移つ
た信者さんもいた。しかしほとんどの人は、日蓮大
聖人様が読まれていた御経が読めて嬉しいと受け止
めてくれた。

文末になったが、改めて、山口師はじめ、今の時
代に、読むべき世雄偈の大切さを伝えてくれた先人
に冷笑した非礼を詫びると共に厚く感謝申し上げます
次第であります。

立教開宗七百五十年記念出版

読むべき「世雄偈」の大切さ

二〇〇二年四月二十八日発行

編集発行責任者 廣 田 頼 道

〒720-0014 広島県福山市千田町藪路四二三

TEL・FAX 〇八四(九五五)五六〇三

日蓮正宗 三 寶 院 内

elise@coral.pala.or.jp

郵便振替 013601311079

三 寶 院

正
誤
表

左記の通り、誤記がありましたので訂正致します。

十頁下段五行目 (誤)相知是↓(正)相如是